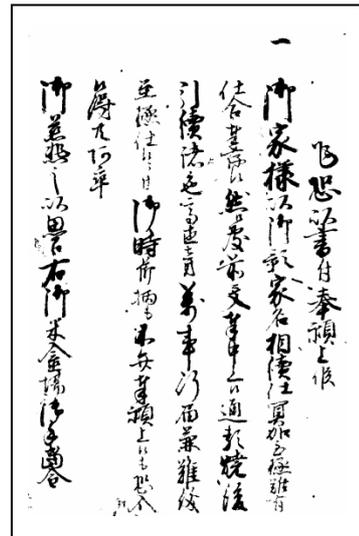


文章を読む5



前回の続きです。(k)の最初の **し** は、何度も出てきた「御」。



(k)

次は「時」で、これも読めるでしょう。次の **節**

はかなり崩されていますが、次の **柄** は「木」か「木」に「丙」なので、「柄」のようです。

そこで「時 **節** 柄」なので、「時節柄」？となり

ます。この「節」という字は「^の之節」などの使い方によく出てくる字です。

普通は **節** や **若** という崩し方で出てきます。

次の **も** はひらがなです。「も」です。 **朱** は **不** という漢字で書いてあ

る、たとえば「不」だとわかりますが、**朱** だけでは「米」？「朱」？にも

見えます。しかし、慣れてくると、**朱** を見るときにその下の **朱** も目に入

り、**朱** という感じだから「朱」で、「不朱」(「^{わきま}弁えず」)という熟語だな、とわかるようになります。いずれ出てきますが、「無之」(これなく)「有之」(これあり)「於」(において)、すでに出てきた「可申」(もうすべく)など、レ点などで返る熟語は余り多く

ありません。なお、**朱** の最後に付いている **朱** (“点”)は何だ？、と言うか

もしれませんが、**竹** (竹) **升** (升)なども最後に“点”がありますから、こういうものだと思ってください。

(L)の部分は、上の3文字は、完全に復習です。「奉願上」。願がやや読みにくいですが、前後から「願」しかありません。次の **候** は一瞬「に」？と思ってしまいますが、ひらがなの「に」は滅多に出てきません。「に」は「尔」という字を使うか「ニ」とカタカナで書くことがほとんどです。したがって

候 は「候」。最後の **も** は、先ほど出てきた「も」です。第3回の時に「書翰

などを除き、江戸時代の古文書はだいたいのパターンが決まっています、使う文字(語彙)はそれほど多くない」と書きましたが、少しその意味がわかっていただけただけでしょうか。



(L)